

陽は中天を過ぎていた。李達達は、石勇が担いできた水や食料を交互に摂り、一番近くの民家で用を足したりしていた。南門周辺の民家は時ならぬ騒動に仰天し、ほとんどが家を捨てどこかへ避難している。こんなことでもなければ、きっといい春の日和だったのだろうと曹瑛は思った。

「夏でなくてよかった」

曹瑛は小声で呟いた。

暑い夏なら、雪華の火傷から毒が回るのも早いことだろう。水月の上で前のめりになっている雪華の布を替えながら、曹瑛はそう思っていた。火傷は深いものが胸に二つ、浅いものが背と両脇に二つずつあった。合わせて六箇所。胸が最もひどく、乳首は両方とも失われている。丁洪の異常さが、あらためて曹瑛の脳裏に浮かんだ。死んでよかった。いや、死なねばならない男だった。

曹瑛は、これまで人を殺したことはなかった。賊に襲われた三年前のことは憶えている。

雪華と石勇が賊を殺したところも見ている。それは仕方のないことで、そうしなければ自分達は助からなかったと思う。それに、あの時の賊は人ではなかった。人ではないものを殺す。そのことに大きな心の負担はなかった。

でも、わたしはあまかった。曹瑛は後悔した。雪華に言われて、生き残った子供達は身を守る術すべを修練させられた。最も熱心だったのが黄玉だった。もともと素質があったのか、驚くほどの速さで剣の腕を上げた。聞起と陳統は、武技というよりそれぞれの得手なところを伸ばしていった。石勇は、もともと身体が大きく力もあつたので、それに磨きをかけようと一人で努力していた。わたしは……。中途半端だったと思う。自分には、素質もないし力もない。出来ることといったら弓だった。直接相手の血を見なくて済む。それも弓を選んだ理由だ

った。剣で刺す、槍で突く、刀で斬る、曹瑛はその感触を想像するのが嫌だった。だが、それは逃げでしかない。今の曹瑛には、それがよく分かる。自分を守るためだけでなく、自分の大切な人を守るためにも、戦いを避けてはならない時がある。逃げてはならぬ戦いがある。曹瑛は、優しさが弱さの裏返しでしかないこともあるのだと気づいた。今までのわたしでは駄目。雪華姉さんのために、わたしは強くならなくちゃ。曹瑛はそう心に誓った。

「いよいよお出ましか」

李達の声が聞こえた。

「廂軍じゃないか。さっきの奴らとは違うみたいだ」
陳統の声だった。

「もう一営動かしていたようだな。城内の北を見回っておったのだろう。騒ぎを聞きつけて、こっちに回って来たのだ」

「外の禁軍でさえどうしようか迷ってるっていうのに。これじゃ、前門の虎後門の狼だ」

陳統の声は悲鳴に近かった。

「どうする。黒旋風」

晁蓋の声も動揺を隠せなかった。石勇は黙って鉄棒を握り締めている。曹瑛も弓に矢を番える。

宮城に続く大路に、次々と兵が現れた。やがて、兵達は隊伍を整えはじめた。先頭には、さきほどと同じく馬に乗った男がいた。

「儂は寶烈然。具冠を殺したのはどいつだ」

寶烈然の声には怒りが籠っている。

「儂だ」

李達が一步前に出た。

「おまえか。よくも我が同僚を手にかけておったな。儂が成敗してくれる。名を名乗れ」

「李達。黒旋風と呼ばれておる」

寶烈然はそれを聞いて、一瞬怯んだ様子を見せた。

「銅堤山の、あの黒旋風か……」

兵達の間には恐慌が走った。最前列にいた兵が、慌てて後ろの列に戻ろうとしている。

「石勇、こいつは前の奴ほどじゃない。儂は禁軍の動きを見る。こいつはおまえに任せる」

李逵がそう言うと、石勇は嬉しそうな顔をした。

「俺がやっついていいんですね」

「そうだ。ただし、儂が合図した時だ」

それから、李逵は曹瑛に向かって言った。

「曹瑛、兵達がへたに動かないように、何人が射抜いてやれ」

曹瑛は頷くと、続けざまに三本の矢を放った。

最前列の兵士が三人、後ろ向きに倒れ込んだ。兵達が怯えた顔を見せた。さっきの廂軍

より質が悪い。曹瑛はそう思った。

「曹瑛、戦士の顔になってきたな。もともと、よい目を持っておったのだ、おまえは。その素質が表に出るのが、ほんの少し黄玉より遅かっただけだ」

そう言い残して、李逵は城門の外に出た。禁軍騎馬隊はまだ動きを見せていない。廂軍

が門外に押し出す、その時を待っているようだ。

「つけめはそこか……」

李逵はつぶやいた。禁軍と廂軍が同時に襲って来る。それが恐れていた筋書きだった。

「小父さん、向こうから馬が」

城壁に登って偵察していた陳統が叫んだ。

「どのくらいの数だ」

「五十くらい。山賊のような格好だ」

来たか、と李逵は思った。

「どんどん近づいて来る。禁軍の横を通り抜けた。旗を掲げている。

黒い旗。赤い刺繍で風って描いてある」

李達は石勇に言った。

「やれ。馬に乗った奴だけだ」

石勇は一声おとおと叫ぶと、飛ぶように竇烈然に向かった。李達の名を聞いた時から戦意を失くしていた竇烈然は、石勇の突進に半ば逃げ腰になっている。馬を返そうとしたが遅かった。石勇の鉄棒が横殴りに馬の前脚を払う。たまらず、竇烈然が前に転がった。立ち上がる間もなく、横から鉄棒が飛んで来た。鉄と鉄のぶつかる音がした。竇烈然の兜が、不自然に左に傾いている。息がない。遠目にもそれが分かった。

廂軍の兵に恐慌が広がり、後ろにいた兵達から次々と崩れ出した。

「冗談じゃない。こんなところで死んでたまるか」

そう言う声がして、兵達は我先にと大路を引き返していった。

「後ろは片づいたか」

李達はそう言つて、曹瑛を見た。

「嬢さんは」

「大丈夫。深い傷もあるけど、息はしっかりしてるわ」

「次に廂軍が来るまで、暫く時があるだろう。おまえはその間、嬢さんの手当てを」

「分かりました」

およそ五十の人馬が城門に着いた。

「蘇源、間にあつたようだ」

李達は頭立かしらだった男に言った。

「兄貴、よく俺を呼んでくれた。嬉しいぜ。この旗、もういっぺん揚げられるなんて夢のようだ」

蘇源は満面に笑みを浮かべていた。どちらかと言うと小男に入るが、肩幅が広くがっしりした体格をしている。

「仲間を連れて来てくれたのだな」

李達の声は優しかった。

「済まねえ、兄貴。これで全部だ。兄貴とともに戦いたいと全員来たんだが、これが、今の俺達の精一杯なんだ」

「俺はこんなに来てくれるとは思っておらんかった。おまえはよくやってくれた」

「兄貴、俺達の仕事はあの騎馬隊にぶつかることだな」

「禁軍だ。およそ十倍。軽装だが侮れん」

「兄貴、遣いの者からある程度は聞いたが、詳しい事情は分からねえ。一体どうしてこんなことになったんです」

「詳しく話そう。皆、こっちに来てくれ」

李達は蘇源達を連れて曹瑛のもとに行った。曹瑛は蘇源達に軽く礼をした。李達がこれまでのいきさつを語った。

「そうですか。そういうことで兄貴は黒旋風に戻りなすったんだ。いや、ひでえ話だ。魯權はいつか殺つてやろうと思つてたんだ。黄文炳もだ。それにしても、こんないい娘さんを……」

蘇源達の間、怒りが広がっていくのが分かった。

「蘇源の兄貴、こんな非道を見逃しちゃ、漢おとこがすたるってもんだぜ。黒旋風の大兄貴、俺達の命、遠慮せずに使つてくんない。賊と呼ばれている俺達だが、どっちが本当の賊か、世間の奴らに教えてやりやしようぜ」

李達は男達に頭を下げた。

「済まん。捨石にするかもしれない。だが、嬢さんを救うにはおまえ達の力が必要なのだ。許してくれ」

男達の一人が答えた。

「黒旋風の大兄貴、気にせんでくれ。どうせ一度は捨てた命だ。こんなつまらねえ命でも、この真つ直ぐな娘さん達の役に立てるとなりやあ、望外の幸せでもんだ。大兄貴が惚れなすった娘だ、きつと民のために大きな仕事をしてくれるはずだ。そんな大仕事に噛ませてもらえるんだ、命の一つや二つ、惜しむ者なんざいやせんぜ」

「兄貴はこの若者達に必要だ。ここは俺達に任せてくれ」

蘇源の言葉だった。

男達の顔つきが精悍になっている。詳しい事情を知り、命をかけるべき意味を知ったようだ。そして、それに誇りをいただいたようでもあった。

「皆、やってやろうじゃないか。禁軍の奴らに一泡吹かせ、この娘さん達を逃がしてやろうじゃないか」

おおという鬨とぎの声が上がった。

「兄貴、それじゃ早速やってみます。一度や二度では無理だと思いますが、なあに、何度でもぶつかってやります。奴らに隙が出来たら、俺達のことなど構わずに逃げてください。十倍の数なんで、必ずとは言えませんが、出来るだけのことはします」

「蘇源、出来ることなら死なんでくれ」

「兄貴、死を懼おそれてちや十倍の敵には当たれませんぜ。兄貴のように一人百殺とはいきませんが、一人十殺のつもりで当たろうと思います」
李達の胸に熱いものが込み上げてきた。

「それでも死なんでほしい」

蘇源は笑いながら頷いた。

「兄貴とまた一緒に戦えて、俺は嬉しいんだ。銅堤山の頃が一番楽しかった。兄貴が消えてから、俺達はまるで抜け殻だった。兄貴が抜けたのはこのためだったんですね」

「そうだ。九天玄女の指示だった」

「へえ、あの婆さん、いや、とても婆さんには見えねえが、そんなことを」

「玄女様は、浮世離れしてはおるが不思議な力を持っておる。儂の本当にしなくてはならぬことが、宋家村にあるとな」

蘇源は雪華に目を遣った。

「なるほど、それで腑に落ちた。確かにあの婆さん、人とは思えねえからな」

「済まんな、蘇源。おまえ達を頼るしかないのだ」

「兄貴、水臭いぜ。それから、今後役に立つから言っておきます」

「何だ」

「陳達が汾州近くの東汾山にいる。汾水のこっち側だから、連絡もつけやすいと思います」

「跳澗虎か」

「あいつは騎馬での戦いに長けている。役に立つと思います」

「分かった。逃げ延びたら連絡をつけるでしょう」

「それじゃ行きます。皆、行くぜ」

蘇源の号令に、男達は一斉に城門を出た。間近で聞く五十もの馬の疾走は、まるで雷のようだと曹瑛は思った。

いきなりだった。賊の一団が次々と城門になだれ込み、暫くするとぶつかって来た。

馮湧にはわけが分からなかった。なぜ、賊が自分達禁軍を襲うのか。

亀伏山に籠っていた賊だと兵達が騒いでいる。数は少ないが、その勢いには鬼気迫るものがあつた。最初のぶつかりで、十人以上の兵が馬から落とされた。それぞれに異なる武器、異なる兵装の賊達が、命も顧みず突っ込んで来る。禁軍としては、まさか賊が突っ込んで来るとは思わなかったもので、不意討ちを喰らう格好になってしまった。だが、何としても数が違う。最初の一撃を持ちこたえようと、後は賊の方に犠牲者が多く出ていた。

それにしても嫌な任務だった。いや、任務と言えるのだろうか。通常、こんな事態で禁軍は動かない。たかが田舎の数人が、罪人を奪い返しに来たという、ただそれだけのことだった。そんなものは、廂軍の、それも捕盜役人の仕事だった。牢營を破られたのなら、押牢節級あたりが責任をとればいい。もつとも押牢節級は文官だから、うまく責任逃れはするだろうが。とにかく、禁軍が出るいわれはない。黄文炳も忌々しかった。宰相である蔡京の家塾教師に過ぎなかった男が、太原府のような大きな城郭の知府に納まって偉そうな顔をしている。科擧の進士及第と謳っているが、そんな者は珍しくない。馮湧は、嫌々

黄文炳の命令に従ったのだった。

都虞侯が馮湧の横につけた。

※跳澗虎 谷川を跳ぶ虎 ※押牢節級 監獄の長官 ※都虞侯 副都監

「馮都監、奴ら全滅する気でしょうか。どんなに叩いても突っ込んで来ます。これじゃきりがありません。いつそ、こちらから城門を攻めますか」

「その必要はない。廂軍に楽をさせても、何の得にもならん」

黄文炳にもな。馮湧は、喉まで出かかったその言葉を、すんでのとこで飲み込んだ。

「それにしても、おまえの言う通りしつこいな。なぜ、こんな無謀な戦いを挑んで来るのだ」

「兵達の中に知っている者がいて、亀伏山の賊だそうです。普段は旅の商人や役人を襲っていて、太原府を襲ったことはないそうです。私も、大人しい賊だと思っていました。それがこれです。牢営を抜け出したという罪人は、一体どんな奴なのでしょうか」

「私も聞いておらん。牢営から逃亡した罪人が城門の外に出ないように、城外で見張れとしか命令を受けておらん。だから我々は、城内のことは関知せぬのだ。それは廂軍の役目だ」

「たった一人の罪人のために、これだけの兵を出すのは異常としか思えません。それに、普段静かにしていた賊どもが、うって変わって突撃して来る。ひよっとするとその罪人、とてつもない大物かもしれません」

大物だとは聞いていなかった。若い女と噂されている。だから余計気乗りがしなかった。馬鹿馬鹿しい。馮湧は小声で毒づいた。

「こちらの損害は」

「死者が十二名、負傷者が三十三名。かなりの損害です」

こんなくだらない任務のために、そこまでの損害を出したか。馮湧は歯噛みする思いだった。

「賊の方は」

「正確には分かりませんが、およそ半数には減ったかと」

十倍の数と戦って、まだその半数が生き残っているというのは驚異的なことだった。こちらは禁軍で、軽装備とはいえ、賊とは比べ物にならないほどの装備だった。馬の質も違う。それなのに五回も突撃を受けていた。奴らのどこにそんな力があるというのだ。仲間の死体を回収もせずに突っ込んで来る。一度は馮湧も危険な状況に陥った。馮湧の手前四馬身ほどにまで迫られたのだ。目と鼻の先だった。近くの兵が馬ごとぶつかって難を逃れたが、馮湧の護衛兵には失態と感じられた。馮湧自身は賊など怖れない。だが、こんなところで怪我をするのも馬鹿馬鹿しかった。その賊の顔ははつきりと憶えている。小柄だが頑丈そうな身体で、蛇矛じゃぼこを振るっていた。何よりも、賊が背に挿さしていた旗が不気味だった。黒い旗で赤く風の文字が縫い取られていた。

「あの黒い旗は何だ」

「兵達の話では、黒旋風の旗だ」と

「黒旋風……」

「馮都監は一年前に赴任なされたから、ご存知ないのも無理はありません。三年前まで、大谷県の近くの銅堤山に巢食そうじくっていた盗賊で、その草頭そうとうだった奴です。ですが、忽然と姿を消し、死んだという噂もあるのです」

「そんな奴が突然……なぜだ」

「分かりません」

「あの黒い旗を背負った男が黒旋風なのか」

「いえ、違うと思います。奴は色黒の大男で、二挺斧を得物にしていたと聞いています」

馮湧はもう訊くのを止めた。

「おかしい。この任務はどうしても腑に落ちん」

横で都虞侯も頷いていた。

蘇源の全身は、自らの血と返り血とで朱に染まっている。男達の半数が失われていた。

「蘇源、もう休め。奴ら堅陣を組んでおる。ここは、一旦退く方がい

い」

「兄貴、済まねえ。逃げられるほどの隙を作れねえ。だが、何度でもやるぜ」

「おまえ達は十分やった。暫く休め。馬を潰してしまおうぞ」

そう言われて、蘇源も生き残った仲間を見回した。どの顔にも疲労の色が濃かったが、目の輝きは失われていない。蘇源はにやりと笑って李達を見た。

「兄貴、大丈夫だ。俺達はまだやれる」

晁蓋が馬を走らせて李達の前に出た。

「黒旋風、もう見てられない。俺も行かせてくれ。この人達ばかりに犠牲を強いるのは耐えられない」

李達は腕を組み、少しの間考えていた。

「よし、最後にもう一度ぶつかってみるか。晁蓋、蘇源の左につけ。

陳統は右だ。儂が道を作る。その後からおまえ達は、禁軍の指揮者を狙うのだ。これだけ数の差がある時は、頭を潰す以外に方法がない。

曹瑛、儂が合図したら、直ちに石勇とともに嬢さんを逃がすのだ。儂らも追って行く」

曹瑛は黙って頷いた。勝ち目のない賭け。曹瑛には分かっていた。

だが、諦めるわけにはいかない。万に一つの勝機でも、自分達はそれに賭けるしかないのだ。

「おまえ達は儂らの援護をしてくれ。敵を殺す必要はない。足止めしてくれば十分だ」

李達は男達に礼をした。

「大兄貴、こんなに充実した気分を味わったのははじめてですぜ。俺達は、嬉しくてしょうがないんでさあ」

「おまえ達には感謝のしようもない。死んだ者の心を、儂らが受け継ぐしか礼が出来る。今は、それしか言えん」

男達の雄叫びが上がった。

「皆、やろうぜ。最後の一人になってもな」

李達が双斧を手にした。一声おとおと吠えりと、猛然と禁軍の真ん中に突入した。

禁軍の兵達は驚いた顔をした。たった一人で、それも徒歩かちの男が向かって来る。馬鹿げている。そういう表情だった。

李達が、一番手前の馬の下にもぐった。馬が前脚を斬られ沈み込んだ。あつという声を上げて、乗っていた兵が転げ落ちた。兵の身体が地に落ちる前に、その首が宙を舞った。切断された首から、左右二筋の血が噴水のように噴き上げていた。

李達は舞いながら進んで行った。馬が次々と沈み込み、続いて兵達も振り落とされる。

「今だ」

李達の叫び声が聞こえた。

蘇源と晁蓋、そして陳統が同時に飛び出した。陳統の乗る弦月だけが先行する。弦月は、騎兵のすぐ手前に出ると大きく飛び跳ねた。弦月が地に降り立った時、騎兵の喉笛が鉄扇の先で破られていた。

「まず一人」

陳統はそう言って、次の相手を探した。

「この晁蓋が相手だ」

晁蓋が大声を出して、陳統の背後に迫った騎兵にぶつかった。二・三合揉み合った後、騎兵が腹を押さえて馬から滑り落ちた。晁蓋が陳統を見た。

「おまえばかりにいい格好はさせないぞ」

晁蓋が片目をつむって言った。

「馬鹿、そんなこと言ってる時かよ」

二人は同時に笑った。戦場の高揚が、二人の心を奮い立たせている。二人をすり抜け、黒い旗が敵の真ん中に突っ込んで行った。たちまち、騎兵の一人が馬から叩き落される。蛇矛が次の獲物を探して舞っている。

「俺達も行くぞ」

晁蓋が陳統を促した。二人は左右に分かれ、敵騎兵隊の中に突入した。

周囲では男達が必死で戦っていた。一人二人と、男達が馬から落ちていく。だが、押し込む力は落ちていない。

李達は振っていた斧を右手に戻した。三十人余りの騎兵が血祭りに上げられている。指揮者は明らかに動揺していた。その周りに、十人ほどの騎兵が守るように囲んでいた。

陳統が鉄扇を舞わせて敵を倒している。晁蓋が柳葉刀で鎧ごと敵の肩を斬り裂く。

急に騎兵が後退した。

「まずい」

李達が叫んだ。

「退くんだ。矢が来る」

李達の叫びが戦場にこだました。陳統と晁蓋が振り向く。

「諦める。これだけの数に矢を射られたら、とても敵わん」

その言葉が終わらぬうちに、黒い旗が飛び出して行った。

「蘇源、戻れ」

李達が絶叫した。その声を振り切り、蘇源は指揮者に向かって突進した。黒旗の棹が、大きく後ろにしまっていた。

李達が蘇源を追った。だが、徒歩では追いつけない。陳統と晁蓋も、二呼吸遅れて李達に続いた。

禁軍が馬を揃えた。弓を上げて、一斉に射た。蘇源が蛇矛を回す。数本の矢が弾き飛ばされた。続けて矢が来た。蘇源に矢が立った。馬も膝を折った。騎兵が三人、蘇源に向かって駆け出した。

「蘇源」

李達が一声吼えて板斧を飛ばす。騎兵の馬が二頭、膝から下を失くした。残った騎兵が慌てて自陣に戻る。陳統と晁蓋が、李達の背後から飛び出し、蘇源の両脇に手を入れて持ち上げた。そのまま蘇源を連れ帰る。

「蘇源、大丈夫か」

蘇源は矢を五本受けていた。

「兄貴、済まねえ。頭を取れなかった。もう少しだったんだが」

「分かった。しゃべるな。今、矢を抜くぞ」

鏃^{やじり}は深く喰い込んでいた。抜けば血が噴き出すかもしれないが、時間を置けば肉が鏃に絡んで抜けなくなる。李逵は一気に五本の矢を抜いた。蘇源は顔を顰^{しか}めたが、声は立てなかった。

「おまえ達に怪我はないか」

李逵が陳統と晁蓋に訊いた。

「何ともない」

答えたのは晁蓋だった。陳統は蘇源の手当てにかかっている。

「もう陽が暮れる。今日はここまでだ。奴らも暗くなつては動かんだろう」

「けど、こんなところにいたってどうしようもない」

「それは分かっている。あともう一つ、それが着けば何とかなる」

「あと一つって、あてでもあるのかい」

「嬢さんを助けたいと思う者が、まだおるだろう」

「ああ、そういうえば聞起がないな。それと黄玉」

「そうだ、あの二人が間に合えば、この膠着も解ける」

「黄玉か……」

「どうした、不満でもあるのか」

「そういうわけじゃないが、俺はあいつが苦手なんだ」

李逵は苦笑した。

「そうか。おまえはいつも黄玉にこっぴどくやられておったからな」

「あんたより恐かったぜ」

二人は大声で笑い合った。李逵は、いつの間にか頼もしくなった陳統と晁蓋を見て、脱出は不可能ではないと確信した。

「石勇、暗くなったら廂軍が動き出すかもしれん。おまえは、寝ずの番をするのだ」

「分かりました。それより、姉ちゃんの方は大丈夫なんですよね」

曹瑛が石勇に頷いた。

「それなら何日だって頑張れる」

石勇は鉄棒を持つ手に力を込めた。

宮城に続く大路といっても、真っ直ぐな路ではない。太原府は、北漢が滅びた後、城内に真っ直ぐな長い路を造らず、その多くが丁字路になっていた。遼の騎馬隊が攻め難いようにとの配慮だった。だがこうして城門にいと、どこから兵が出て来るか分からず、意外なほど緊張を強いられる。

「疲れてしまつては、いざという時役に立たん。疲れきる前に儂に言うのだ」

李逵が珍しく石勇の心配をした。

「俺は大丈夫です。雪華姉ちゃんが元気になつてくれれば」

「もう一頑張りだ。とにかく、今夜を乗り切り切らねば」

李逵の言葉は、自分に言い聞かせるようでもあった。

馮湧はなかなか寝付けなかった。初更はとうに過ぎ、兵達も半数は休んでいるはずだ。城外といつても、太原府のように大きな城郭までは、民家がないというわけではない。小さな県程度の家屋があり店もある。それだから、騎馬の力を生かすような戦い方は出来なかった。今も、馮湧が休んでいるのは民家の一つだった。禁軍が現れたので、付近の民は一斉に避難している。春とはいえ、夜はまだ冷える。馮湧は、兵達にも空いている民家で休むことを許した。

馮湧は起き出して、民家の外に出た。いつもなら点っているはずの灯りが見えない。窓に灯が見えるのは、兵達が休んでいる民家なのだろう。

「一体、どうなっているんだ」

馮湧はつぶやいた。

兵達の十分の一近くを失った。遼との戦いか、よほど大きな賊とのぶつかり合いでもない限り、これほどの犠牲を出すことはない。何かが間違っている。はじめからそう感じていた。なぜこんな任務を、禁

軍が請け負わねばならないのか。あの時、黄文炳の言葉に従わなければよかったのか。だが、黄文炳は上官である。この太原府の最高責任者でもある。その命令に逆らうわけにはいかない。

禁軍には更戍制こうじゆつせいがある。それは、軍とその指揮官との癒着を絶つという目的ではじめられた制度だったが、二・三年で頻繁に將軍が入れ替わるので、軍自体の指揮統率に齟齬そごが目立つようになってきた。馮湧自身も、一年前に太原府に赴任してきた。後二年ほどはこの軍を率いることになる。太原府のような大きな城郭では、兵馬都監は複数いる。馮湧を含め五人いる。それを統率するのが経略使けいりやくしだった。五人の中でも自分は、まだ若く有能だと自負していた。確かに高俅の引きがあったことは認めるが、それも、実力があつたうえでのことだと馮湧は思っている。事実、賄賂なしで武举ぶきよ※にも通っている。槍の腕には自信もある。それが、こんなにくだらない任務で、かくも大きな損害を出してしまった。禁軍兵馬都監として、これは致命的な汚点になりそうだった。

※武举 武官登用試験

「どうしたらいい」

馮湧は呟いた。

夜が明けたら一気に賊どもを蹴散らすか。だが、それは難しそうだった。奴らの一人は黒旋風だという。最後の攻撃に出て来たが、恐るべき男だった。奴一人で十人ほどの騎兵が倒された。騎兵に対する戦いを熟知している。話でしか知らないが、かつて銅堤山に籠っていた時には、廂軍相手とはいえ、一人で百人を斬ったということだ。そんな男のところに不用意に突っ込めば、どれほど多くの犠牲を出すか分からない。では、奴らが出て来たところを叩くか。それが最も現実的な策ではある。だが、ここは原野ではない。奴らが死を覚悟して飛び出して来て、その隙に罪人が逃げ延びる可能性もある。黒旋風一人にあれだけ手こずったのだ。他にも、妙な武器を使う若者や柳葉刀を振るう者も侮れない。あの蛇矛の男は助からないだろう。奴の仲間らしき男達は、まだ二十人は残っているはずだ。これ以上仲間が増えられたらたまらない。馮湧はそう思った。こんなことで他の兵馬都監の

助けを借りるのは屈辱だった。自分の部隊だけで決着をつける。それが、この失態を埋め合わせる唯一の方策だ。やはり、突入か。犠牲を覚悟で、馮湧は殲滅戦の決断を下した。

東の空が赤みを帯びてきた。蘇源の息はいよいよかぼそくなっていた。今は曹瑛が、蘇源の手当てをしている。雪華の容態が安定しているからだ。李達は心配そうに、蘇源の顔を覗き込んでいる。もう限界だということは、誰の目にも明らかだった。

「兄貴……旗は。俺達の旗は」

突然、蘇源が目を開けた。

李達は蘇源の手を握った。蘇源の手から、温もりは感じられない。

「ほら、そこにある。おまえが持って帰ったのだ」

「そうか。この旗さえありや、俺達は何度でも戦える。これは、兄貴と俺達の旗だ。あの頃は楽しかったなあ。これが生きるってことなんだって、よく陳達とも話してたんだ。ああ、また陳達と一緒に暴れたい。あいつは俺より強いから、きつと兄貴の役に立つ。兄貴、役に立ってなくて済まねえ」

「おまえは、俺の予想を超えた働きをしてくれた。陳達だっておまえほどの働きは出来んだろう。おまえが片腕として支えてくれたことを、俺は誇りに思う」

「兄貴。兄貴とともに戦えて、俺達は幸せだった。そのお嬢さん、兄貴、守ってやってな」

蘇源の目が閉じた。曹瑛が哀しく首を振る。

「陳統、済まんが穴を掘って埋めてくれ。旗とともに」

李達はそう言っ、城門の外を見つめた。

「もう何人も死んでいます」

曹瑛が独り言のように呟いた。

「蘇源はな、銀細工の工夫だったのだ。家族を持ち、そこそこの稼ぎもあったのだが、太原府の戸部※の役人から不当な言いがかりをつけられ、その役人を殴ってしまったのだ。それから家族が嫌がらせを受

け、しまいには、役人が雇ったごろつきに家族を殺された。怒った蘇源は、そのごろつきを鑿ので刺し殺した。銀細工に使う鑿のでな。役人の追捕を逃れ山に来た頃は、まだ身体が貧弱でな、蘇源は人の何倍も努力して身体を鍛えた。そのうち、儂の右腕だった陳達と親しくなり、二人で儂を支えてくれたのだ。頭も回るし面倒見のいい男だったから、部下にも慕われておった。今のこの国では、こういう男が長く生きられぬ仕組みなのかもしれん」

※工夫、修理も担当 ※戸部 田税、酒税を管轄する部署。

「悲しいことですね。わたしも大切な人を失いました」

「蒋唐といったな」

「はい」

「曹瑛、おまえは後悔しておるか」

「いえ。雪華姉さんを助けるためなら、わたしはどんなことでもします。わたしが犠牲になることも厭いといません。それに、もう雪華姉さんのことだけじゃないんです。はつきりと言葉では言えないけど、今の世は何かおかしい。真面目に生きている人が馬鹿をみて、ずるく立ち回る者がいい目をみる。そんな世の中は変です。わたし達は、いい物を食べたり、豪華な屋敷に住んだりとか、そんなこと望んでなかったのに、ただ、村をもとのようにしたかっただけなのに、どうしてこんなひどい仕打ちを受けなければならないのでしょうか。すべては、魯權と黄文炳の欲からはじまったことではありませんか」

李達は答えようがなかった。曹瑛の言葉は正しい。だが、正しさが無力な世であることも事実だ。

晁蓋が、城壁の馬面ばめん※から大声を上げていた。

「禁軍が動き出した」 ※馬面 城壁に登る敵を防ぐための突き出し

李達は城門を出て、禁軍の動きを確かめた。

騎兵は十騎一列の細長い陣を組んでいた。城門の外へと延びる道の、幅いっぱいいっぱいの隊列だった。本気で来る。李達は確信した。禁軍の放つ気は、これまでと比べ物にならないほどのものだった。

「晁蓋、下りて馬に乗るのだ。奴らが来たら、まず最初にぶつかるのはおまえと陳統だ」

「分かっているさ。死に行くようなもんだけどな」

「馬鹿を言うな。おまえと陳統に死なれたら、儂の夢見が悪くなる。幸い、奴ら十列しか幅をとれん。まして、密集しておるから騎馬の優位さを生かせん。一人や二人倒すのではなく、敵中に入ってかき回すのだ。そうすれば、大勢の方が混乱は大きくなる。儂はその隙を見て、嬢さんを残月に乗せて逃がす」

「ああ、そういえば俺が眠ってる間に、馬が二頭増えてたな」

「陳統が、残月と石勇が乗って来た馬を呼んだのだ」

「そうか、それなら全員馬で逃げられるってことだな。いや、待てよ。あんたの馬がないじゃないか」

「儂はな、徒歩の方が慣れておる。それにな、誰かが追撃を止めねばならん」

「何言ってるんだ。あんたがいなくなったら雪華だって困るじゃないか。その役は、この俺のもんだ」

「晁蓋、よく考えるのだ。おまえは確かに弱くはない。儂も少々驚いておる。馬の扱いにも天性のものがある。しかしな、陳統もそうだが、一度に多くの敵を倒すことは出来ん。この役にはな、それが必要なのだ」

「俺だって死に物狂いになれば」

「すぐに死んでは意味がないのだ。時間を稼ぐこと。それが狙いなのだ。儂が倒れたら、次は曹瑛だ」

李達はそう言って、曹瑛を見た。曹瑛は、気負うことなく晁蓋に頷いた。

「いいか、この話はもうなしだ。五百近い禁軍が相手だ。一人一人が、持てる力のすべてを振り絞らなくては、ことは成らん。石勇、嬢さんの身体をもう一度確認するのだ。残月から落ちんようにな。おまえは嬢さんを守って、亀伏山に向かうのだ。山の中に入ってしまえば後はどうにかなる。蘇源の手の者が残っておるはずだ。向こうの

方でおまえ達を見つけ出す。おまえの馬では、残月についていくのは難しいだろう。足手まといになりそうだったら馬を捨てるのだ。おまえなら、徒歩でもついていけるはずだ」

「分かってます。敵とぶつからないように、周りの家を利用します」
「それでいい。曹瑛はその後ろにつくのだ。そして、儂が倒れたら代わりを頼む」

陳統が、城門の外の草地から戻った。

「小父さん、用意が出来た」

「そうか、済まなかったな」

李達は蘇源の遺体を抱き上げ、ゆっくりと陳統の掘った穴に向かった。旗を持った陳統がその後が続く。

「蘇源、漢として死んだな」

李達はそう語りかけて、風の旗とともに蘇源の身体を横たえた。生き残った蘇源の部下達が土をかけ、それぞれの思いを込めて弔った。

「おまえ達も本当によくやってくれた。このとおりだ」

李達は、二十人余りの男達一人一人に礼をした。男達の中からすり泣きが聞こえて来た。

「大兄貴、蘇源の兄貴は嬉しかったと思います。大兄貴の言伝を聞いた時は、小躍りして喜んでましたから。もう一度一緒に戦えるって。

あつしらも一緒でさあ。こんなやりがいのある大仕事に誘ってくれて、本当に感謝してます。見りやあこの娘さん、大兄貴が惚れ込んだだけはある。何て言ってもいいか分かんねえけど、この娘さんは、何かとつもないことをするように感じるんだ。それに、そっちの娘さんや若い衆も、何か大切な運命を背負ってるように思う」

「そうだ、この人達を死なせちゃなんねえ」

「俺達は生まれてからこのかた、ろくなことをしなかったが、何だかこれで、人として死ぬる気がするぜ」

「大兄貴。俺達の命、存分に使ってくれ」

「蘇源の兄貴の分まで頑張るからよ」

男達が次々と声を上げる。

李達は、血が出るほど両の拳を握り締めていた。

「おまえ達の命、この黒旋風が受け取った。おまえ達に誓う。必ず嬢さんを助ける。そして、この腐った世を変えてみせる。儂のこの命も、そのために捧げる」

「それでこそ大兄貴だ」

男達の間から鬨とぎの声が上がった。

「陳統、晁蓋、おまえ達はこの男達とともに敵の混乱を誘え。石勇、儂の合図があったら直ちに嬢さんを連れて逃げるのだ。そして、曹瑛。分かっているな。儂が敵を食い止められなったら、おまえが儂の代わりとなるのだ」

李達の声の峻厳とんげんさに、誰もが一言も発せず頷いた。

ここからが本当の試練。曹瑛は心の中でそう思った。